

「言語能力」育成状況の多面的測定 概要

1 多面的測定の目的及び内容

本研究では、言語能力を「読解力の側面」「創造的思考の側面」「他者とのコミュニケーションの側面」の3つで整理を行い、実践に取り組んだ。発達の段階に応じた到達度目標を設定する中で、身に付けた「言語能力」育成状況を検証するためには、単純に1つの調査結果から測ることができるものではなく、多面的測定から分析を行う必要があると考える。

まず、教科特有の「言語能力」と教科特有の「言語能力」を統合して解決する問題は、国語科、社会科、算数科、理科の4教科に関する問題（言語能力に関する検査①）と、「言語能力」を総合的に見る問題（言語能力に関する検査②）の2種類で前年度と同様に、同じ時期に実施し、経年比較で指導の有効性を検証する。どちらも、アカデミック・ライティングで指導可能な言語能力を評価する視点で、本校独自に作成した問題である。

次に、効果検証のための外部調査として、学力の到達度を測る標準学力検査 CRT/目標基準準拠検査、NINO 認知能力検査及び読書力診断検査（いずれも図書文化社）による調査を行い、アカデミック・ライティング指導によって身に付けた「言語能力」について分析を行うこととする。

さらに、児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証するために、保護者へのアンケート調査を行う。調査内容については、児童が「鯨っ子学習」で作成した成果物に対する保護者の評価や、「鯨っ子学習」の取組みに対する保護者の意見を得るものとし、分析を行うこととする。

2 言語能力に関する検査①について

言語能力に関する調査①は、問題提示方法と回答方法を「紙/紙」「ICT/紙」「ICT/ICT」の3形態で行った。本校はGIGA school 構想に基づき、令和3年度5月から1人1台の2in1 パソコンを学習用端末として活用している。同検査においても、この端末を活用した。表1は、言語能力に関する調査①の検査形態をまとめたものである。第1学年については、学習用端末に触れる機会が少なく、紙媒体中心での学習が多いことから、本検査は「紙/紙」のみで行っている。また、第2・3学年もキーボード入力の指導・習得状況を鑑みて、「紙/紙」「紙/ICT」の2種類のみで検査を実施した。第4・5・6学年は、1学年の児童約105名を3形態のグループ毎約35名程度に分けて実施した。

検査方法として、「ICT/紙」は、紙媒体と同じ問題をそのままPDFにしたものを児童のパソコンに送付した。加えて「ICT/ICT」の回答には、「Microsoft forms」を利用した。

表1 言語能力に関する調査①の検査形態

対象学年（実施教科）	問題提示方法/回答方法		
	紙/紙	ICT/紙	ICT/ICT
第1学年（国語科・算数科）	○		
第2学年（国語科・算数科）	○	○	
第3学年（国語科・社会科・算数科・理科）	○	○	
第4学年（国語科・社会科・算数科・理科）	○	○	○
第5学年（国語科・社会科・算数科・理科）	○	○	○
第6学年（国語科・社会科・算数科・理科）	○	○	○

3 言語能力に関する検査②について

先述の通り、教科横断的な「言語能力」を総合的に見る問題（言語能力に関する検査②）を本校独自で作成し、全学年において検査を実施した。本校で定めるアカデミック・ライティングで指導可能な言語能力は、①情報を読み取る力 ②情報を比較し、読み取る力 ③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力 ④仮説を立てる力の4点である。言語能力に関する検査②では、当該学年において、児童が身に付けた上記4点の力をどの程度発揮して課題を解くことができるかを検査するものである。そのため、検査問題は、①情報を読み取る力 ②情報を比較し、読み取る力の2点（input）を評価する問題と、③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力 ④仮説を立てる力の2点（output）を評価する問題の構成となっている。その中で、発達の段階に応じた言語能力の到達度目標として、「読解力」「創造的思考」「他者とのコミュニケーション」の3つの側面から分析を行った。

※言語能力に関する検査①②の問題は、著作権上、記載しない。

4 効果検証のための諸調査について

(1) 標準学力検査CRT／目標基準準拠検査

絶対評価法による検査であり、1～6学年を対象にしている。本研究においては、先述の言語能力に関する調査①と同様に、3～6学年においては、国語科・社会科・算数科・理科の4教科で実施した（1・2学年は国語科・算数科のみ）。検査の特色として、年間の指導目標の実現状況を確認するための、客観的な資料が得られることや、指導要録「観点別学習状況」「評定」に沿った資料が得られることが挙げられる。また、「観点別学習状況」と「評定」の判定には、総括的評価法として客観的な基準（尺度）を設定している。これらの特色を基に、基本的な学力の到達状況を測定し、全国平均との比較や経年的な結果と比較することで、本研究の有効性について検討を行うこととする。

(2) NINO 認知能力検査

2～6学年を対象にした検査であり、「CHC理論」をもとに、「思考力」「言語能力」「数的能力」「記憶力」「処理速度」の5つの認知能力を測るものである。検査の特色として、算数・数学のつまずき段階を、前の学年内容をさかのぼって把握できることや、「学習に向かう力」についてのアンケートで学習活動の振り返りができることなどが挙げられる。本研究では、児童の認知能力について、研究前後で比較し検証する。

(3) 読書力診断検査

「読みの力」と「読書に対する意識をみる」調査として、1～6学年を対象に実施する。検査の特色として、読字力、語彙力、文法力、読解力の下位テストで構成されていること、小問別反応分析表等詳細な診断ができること、質問紙による読書に関する意識調査が付いていることが挙げられる。本研究では、児童の読書力について、研究前後で比較し検証する。

5 保護者へのアンケート調査について

総合的な学習で行う「鯨っ子学習」の成果物として、児童がプレゼンテーションソフトを活用して1人1台の学習用端末でまとめる。保護者アンケートは、学習用端末を持ち帰らせ、児童が保護者に向けて発表する課題を設定し、発表を聞いた保護者からFormsで回答を得る方法で行う。アンケート調査の対象は、「鯨っ子学習」の年間計画を鑑み、4・5・6学年の保護者とする。